1.　大学で学んでいること

私は大学で都市地域社会学を専攻するゼミに所属している。私の興味関心が地域活性化にあるからである。この分野を専攻したいと思った理由は、旅行先での誰も使わない鉄路や、何もない駅前という衰退の象徴にショックを受けて、地方を衰退から市民の人々が充実した暮らしをする方法について学びたいと思ったからだ。この大学で学んだことは、私が関心を寄せている公共交通網は目的を達成するための手段であって、それがないことで市民は何を得られないのか、逆に目的は明確にあるのに、公共交通網のせいでできない状況はないのかという視点に立って公共交通を考えることだ。すなわち、公共交通を研究するとは、なぜ公共交通を使ってそこへ行くのかという目的と手段が正しく機能しているかを研究することだ。

2.　長野県に対して持っていたイメージ

愛知県出身者として長野県木曽地方にはレジャーで多く訪問を重ねていた。そこで持っていたイメージは、長野県は３つのエリアに分かれているというイメージだ。スキーをしたり、そばを食べたりしに訪れる木曽地方、登山や温泉が有名な諏訪・松本地方、東京の別荘地で遠い世界のイメージがある上田盆地・長野盆地である。同じ長野県内に身近ではない地域があるものの、どのエリアも山や森林、温泉を抱える一大観光地として観光振興にかなり力を入れていると感じていた。加えて、長野県は健康や教育という分野で見聞することもあり、長寿都市、長野への大学移転、教育移住を振興しているという情報は事前に仕入れていた。

3.　実際に来て気づいたいいところ

今回のフィールドワークで気づいた長野県のいいところは、「長野県が観光の目的を果たしているいい取り組みをしている」ということである。というのも、私が考える観光における目的効果とはやっている側が楽しいか、やってくる側が楽しいか、周囲の人に好意的な波及効果があるかである。長野県での取り組みはローカルヒーローがやりたいことをやり、その営みが来てくれた人に楽しさや新しい出会いを与え、それが観光消費として長野県の経済を回している、そんな構図にみえた。

そもそも観光は何を目的にしているのだろうか。社会学者ジョン・アーリは「観光は余暇活動であり、これはその対照物を前提にしている。対照とは、制度化され組織化された労働である」としている(アーリ 2014)。近代の観光は労働との対比で発展していった。近世から近代前期の観光は寺社参詣であり、人々の心の支えという生活の１部であった。対して、近代の観光は昭和時代の大人数であれ、昨今の個

人旅行であれ保養や娯楽、体験が大きな要素を占めている。そして地方都市は都会を無個性の働く場とし、都会では得られないものを武器に観光産業を成長させていった。しかし、この都会では得られないものを提供する観光は価値観の固定化を行っている面もある。前述のアーリが指摘しているのは、田舎だけの強みを維持し披露することは、田舎であることの価値が固定され、田舎から脱皮することを妨げることがあるという。つまるところ、近代の発展によって人々が流動的になると田舎性、都会性を武器とした2つの塊ができ、それを人々がモビリティを通じて双方に接触していく構図ができていったのだ。長野県における観光もそのような都会との対比を感じるものであった。今回の旅行でのローカルヒーローの語りは無意識的に都会との対比を語っているものと受け止めることができた。

「アクティブラーニングは都会ではできない」

「五感を使った交流や研修はここでしかできない」(渡辺亮氏 2023年9月4日のお話しより)

「これからはモノよりも人の時代になる」(884氏 2023年9月5日のお話しより)

東京ではモノを使って社会課題を解決することが数多く行われている。近年建設が進むインクルーシブ公園や、ミヤシタパーク、都心の再開発などがそうである。かつての長野県もそうであった。その象徴ともいえると考えているのが長野オリンピックである。しかし、今回話を聞いた人は繰り返し「人」による観光を掲げていた。なぜ東京のようにモノによって解決することをしないのだろうか。自分の考えではあるが、無意識的に東京と同じことをしても長野県ではうまくいかないし、長野県なりのやり方をしても東京と同じような効果が得られると考えているのではないかと思い至った。都会性と田舎性という授業で習ったものを現実として体験できた瞬間であった。

4. もう少しこうだったらいいなと思うこと

今回のフィールドワークでの課題はモビリティであると感じた。道中タクシーを多く活用したことは、公共交通の脆弱性を示すものであるし、2日目の観光も参加者が皆近い場所に固まったが、これもある種行けないということが行動に制限を掛けているのではないかと感じる部分があるのだ。強く感じたのは初日の「ライジングフィールド軽井沢」で渡邊さんの話を伺っているときである。「ライジングフィールド軽井沢」の渡邊さんは軽井沢と都心を使い分ける2拠点生活を行っている。これは移動が苦にならない手段を持っているから実現できるのだと気が付いたのだ。そして「ライジングフィールド軽井沢」は都心の企業が研修に集うことが多いという

話から、軽井沢と都心がつながっているアクセス条件を前提にビジネスが成り立っていると思った。

目的づくりは各地域で精力的に行われているということを今回体験することができた。その現地でしか得られない体験に、どうやって都会の人がアクセスできるような環境を整えることができるかが求められているのではと思う。モビリティとは人の移動だけでなく、モノや情報の移動をも含む言葉であるため、交通手段、物流、広報戦略ふくめて、この町への心理的遠さの解消に努めることが必要なのだろう。実際、時間帯によっては私が東京駅から家に着くまでの時間で軽井沢に到着できる。長野県という場所への心理的近さと、かつ個々の観光地がどんな人でも容易にアクセスできるという安心感を与えることが行政やまちづくりには求められているのだと思う。

目的があれば人々は手段を確保しようとする営みは古くから行われた。深海に行きたいという目的が深海探査船を作り上げ、宇宙を探したいという目的が望遠鏡を作り上げたのだ。深海探査船なくして、深海のことを知れない。望遠鏡なくして宇宙のことを知れない。地域の人たちが地域を盛り上げようと目的づくりを精力的に行っているのであれば、それと同じようにその場所にいくための手段について考える必要があるであろう。全体をまとめ上げる人たちが、個々の取り組みの場所にアクセスしやすいような移動手段と、車がない人たちにも情報を届けられる取り組みがより多くの人が人の魅力あふれる長野県に繋がりをもってもらうために必要なことではないだろうか。

5. ローカルヒーローの話/フィールドワークを通じて記憶に残っていること

(写真 1)　停車場ガーデン(左)と懐古園(右)(筆者撮影)

２日目に訪問したのは長野県小諸市である。ここで相反する体験をすることができた。それは飽きと高揚であった。お読みになる方の気分を害してしまったら大変恐縮ではあるが、正直に申し上げると懐古園は満足のいかない場所であった。対照的にすごくワクワクしたのは停車場ガーデンであった。なぜなら、町一番の観光資

源になる城を活用している地域は少なくないがゆえに、小諸城跡に城下町を活かした観光をしようとしている他の地域となにも変わらない単調さを感じたからだ。また、併設の資料館にも足を運んだが、ここを魅力的に感じる人はあまり多くないのではないかと感じた。資料館単体は魅力にあふれており、その人についての見識を深化することができたけれども、島崎藤村や小山敬三に興味がない人には響かない、ただ知ることしかできない空間になっていると感じたからである。市民の方は小諸市にある潜在資本を活用していい街をつくろうと努力していらっしゃることは市のウェブサイトや停車場ガーデンのサイトなどを読んで知っているが、その結果できたものが他の都市でもやっていることの焼き直しと感じてしまった。実際過去に訪問した三重県松阪市と全く同じという印象を受けた。この都市は城跡を公園として活用するために桜の植樹を行い、本居宣長の資料館を建て、城下町の保存を行っている地方都市である。風景を残すことを基本としていて、歩いていて楽しい街ではあるけれど、見る以外の楽しみ方が難しかった町だったと記憶している。

翻って、停車場ガーデンに魅力を感じた。停車場ガーデンは「衰退が進む駅前のにぎわいづくりに向けた、エリアマネジメントとしての公園づくり」として 2005 年から始まったプロジェクトで駅前に賑わいを出そうと殺風景な駐車場から市民が協働し、憩いの場になるガーデニングづくりが行われた空間である。私が訪問した際も多くの人が通行し、挨拶や会話を交わした明るい空間になっていて、電車の時間がなければもう少し滞在したいと思わせてくれるここにしかない空間だった。

この差は何だったのか疑問を抱きながら、その後のプログラムに参加していたが、同日夕刻に開かれた「姨捨ゲストハウスなからや」オーナーの鍛冶さんの語りに自分の感じている違和感を言語化するヒントがあった。それは「姨捨を見る、撮る以外の使い方をしないとそれ以外の魅力に気付かないし、それで有名だと全員が深く知っていると勘違いしてもらう」という言葉である。お城という観光資源は往々にして見ることに主眼が置かれることが多い。

私は宮城県女川町が好きである。それはなぜかというと震災を契機に自分たちの町にあるもの、ないもの、あってほしいものを住民全員で話し合い、0 から作りたい街を作り上げたからである。そこにあるのは”女川の”震災の記憶、過疎の進む村という現実を受け入れたコンパクトなにぎわい、山に囲まれた漁村を活かした空間づくり、そして駅併設の温泉で感じた人とのふれあいである。それらを訪問するたびに感じられるから好きだ。女川らしさを感じることと住民の気持ちが伝わる街並みが好きなのだと思う。小諸でもそのような市民の営みやその土地らしさを感じられた停車場ガーデンに興味を抱き、逆に城下町を活かしたまちづくりをしようとしている他の町と同じ雰囲気をもつ懐古園にはらしさを感じられなかったのだと思う。

6.　貢献できそうなこと

私が貢献できそうなことは、学んでいる人の移動と観光について提言することではないかと思う。そこで自分の興味関心のあるモビリティの分野の話をさせていただきたい。長野県の観光はウォーカブルであることを推している地域が多くある。軽井沢のモールや小諸のコンパクトシティ、上田や戸倉上山田温泉の浴衣で町を歩く取り組みが挙げられるだろう。しかし、スポット単位ではウォーカブルでもスポット同士は自家用車に身をおかなければならないという現状があるように思う。私が考えたことは、ウォーカブルはスポット的な整備が行われているがスポット同士をウォーカブルにつなぐ整備はできないものか、ということである。面的に整備することで、地域全体を知ることができより多くの観光地へ足を運ぼうというモチベーションがわく。実際、官民双方から MaaS の取り組みが多くあることはうかがうことができた。昨今のバスドライバー不足などの社会状況も併せて、サイクリングロードやグリーンスローモビリティ道路を整備して、観光客と市民がスポット同士を行き来できるようになることが望ましいのではないだろうか。

7.　あったらいいなこんな取り組み

私は、小諸城跡を小諸らしさであふれる空間にするために、市民と城を使ったイベントを提案することが良いのではないかと考えている。ただ、はじめに断っておくと今回のフィールドワークに当たって、小諸市の資料を拝読し、小諸市全体で数多くの街づくりのための会議が開かれていることは存じている。その結果として、今の閑静な、ある種過去に思いをはせられるような小諸市が好きだという結論に至ったのであれば、その選択を心から応援したいと思う。しかし、個人的に訪問した感想として、懐古園はもっと市民の活力を発揮できる場所になるのではないかと思うのである。

写真 2 壁面緑化の例(山口市ウェブサイトより引用)

具体的にはお城の石垣に壁面緑化を施し、花にあふれた城を作ったり、周辺の地形を活用したアドベンチャーを市民で作ったり、青空演奏会を開くことなどが、稚拙な頭脳でもって思いついたアイデアである。このようにどこにでもあるような痕跡としての小諸城ではなく、城を使った市民の主体性をはぐくむ小諸城

にすることが小諸らしさを感じさせるのではないかと思うのである。往時の姿を思い、想像力を養う今の小諸城跡を好む人もいるであろうが、現代だからこそ彼らのことを大事にしながらも市民の主体性に合わせた空間づくりができるのではないかと提案する。なぜなら近年の技術によって空間は眼前にある空間だけでなく、仮想上にいくつもの並行した空間づくりができるようになったからである。ある時は市民の活力を浴び、ある時は在りし日の姿に思いをはせ、またある時は紅葉や雄大な風景を楽しむ空間になる。そんな小諸城跡の楽しみ方ができると面白いと考える。そのためには歴史的価値をしっかり調査し、まとめたうえで歴史的建造物を作り変えることをよしとする社会のまなざしが必要になる。そんな新しい価値観の第一歩に小諸市はなるポテンシャルを持っていると思う。

8. 自分たちの時代の旅の在り方

私たちの時代の旅は個人の旅であることはトレンド的にもデータ的にも明らかになっている。そのため、その人の好みに合うものを選んでいくし、選ばれていくことが肝要である。それでもなお多人数で旅行するときには今回のように仲良くなることを目的とし、その仕掛けがあることを望む。私たちの時代の旅行はその選択一つ一つがパーソナルなのである。何が好き、どこへいく、誰と行く、その選択全てがパーソナリティの表出につながる、自分らしく、あるいは自分の楽しい人と何かをすることを求める。

その中で今回の旅行で何度も触れられた、人を舞台にした観光とは私が考えるに「来る観光客、ナビゲーター、宿泊環境が信頼できるという社会的信用のもとにある観光」であると考える。「人を目的にする旅行」を実り多いものにするために、私は 3 つのハードルがあると考える。それは相互の社会的信頼感、経験格差、情報である。

相互の社会的信頼感とは、観光客は訪問地で交流する人が優しくて感動を与えてくれる人に会いたいと思い、同時に観光地側もゴミを不法投棄したり、地域を荒らしたり、騒音を出したりといったことをしない人たちが来てくれることを望んでいることをいう。お互いが行きたくなり、受け入れたくなる人付き合いを作るためはどうしたらいいだろうか。私は社会的バッシングを受けても、そのようなことは伝えなければならない時代に入っていると考える。その意味で、私たちは最終日の発表でマッチングアプリを提案させていただいた。来てほしい自治体は「私の町ではこんな体験ができますよ」という自己アピールと「こういう人を求めています」というお願いを記入する。そして行きたいとアクションを起こしてくれた人にはちゃんと宣言したことを実行する。そうやってプラットフォームの信頼性をあげるとともに、体験やペルソナ像から来たいと思ってくれるような人にアピールすることが

できるのではないかということである。例えば棚田の維持に観光客が入る、観光客が地元住民をもてなす、観光客が風景の 1 部分として溶け込むといった相互性の観光を作り出すプラットフォームができればと思う。お互いのニーズが分かっていて、かつプラットフォームを通じて信頼できる関係作りができる取り組みが人や体験を求める旅行では必要なのだと思う。

次に経験の格差として男女や年収差による格差があげられよう。グループで話題になったのが、女性陣は今回泊まったような空間（ゲストハウス）に一人で行くことを周りからひどく反対されることである。レスリー・カーンは著書『フェミニストシティ』において、以下のように記述している。「フェミニズム活動家が『レイプ神話』と呼ぶもの、つまり被害者に非難の矛先を向けることを含めて、性的ハラスメントや性暴力を生きながらえている虚偽や誤解がいまだに根強く存在することだ…（中略）…性差別的な神話は街で歩き、働き、楽しむこと、あるいは自らの場所をもつことの自由を自分で誓約するように私たちに繰り返し促している」（カーン 2022)。このように指摘するようにいまだに、女性やともすれば男性も経験の格差がある。体験がオープンで安全で安心なものではない部分がまだあるのだ。その意味では「ライジングフィールド軽井沢」の水回りにこだわり清潔さを維持する取り組みは地味であるがとても大切な体験格差を是正する取り組みであると感じた。行政と民間がやるべきことは派手なキャンペーンよりも、そういったやりたいと思った人が一歩踏み出せない状況の時の壁を取り払うような取り組みであると考える。それは、観光地の安全性の向上や、女性でも旅行していいのだという社会的気運の醸成、悪徳行為の撲滅、最後に前述するような迷惑客の排除であると感じている。願わくは、金銭的な理由で体験を得られない人たちへの補助もあればと思う。それは将来のファンを増やすことと、日本国全体の QoL のためであるので一県や一市町村のロールからは外れるような感触を抱くが。

最後に情報の伝え方の問題である。私たちが情報を得るのによく活用するインスタグラムや旅行雑誌などは視覚から行きたいという感情を沸かせるものである。インスタグラムで共有したり、「いいね」を押しやすいのはおいしそうな料理であったり、美しい風景だったりする。旅行中交換した他の仲間の投稿もそうであったし、私もそうであった。このような視覚から得られた情報による観光は、その旅行者もまた食事や景色といった視覚と味覚の旅行の再生産をおこしやすい。しかし、今回体験できた旅行は人が人を呼ぶ旅行であって、そのような無形の魅力は既存のプラットフォームで伝えることが難しい情報ではないかと感じる部分がある。

以上、相互の社会的信頼感、経験格差、情報をもとにその人がやりたいというニーズにこたえられるようなバラエティーある魅力をダイレクトに関心のある人に伝えるという難しい取り組みが求められる時代であると考えている。

9. 長野県で実現してほしいプロジェクト

実現してほしい観光プロジェクトとしてお役に立てるかわからないが、今回の旅行中にやってみたいなと思ったことを簡単な形であるが、3 つ書き留めさせていただく。1 つは目隠し、耳栓をつけて旅行をするという取り組みだ。1 日目「ライジングフィールド軽井沢」の渡邊さんから伺った、「人は五感を活用できていない」という話と、2 日目の「姨捨ゲストハウスなからや」鍛冶さんの「今までとは違う視点から観光地を見る必要がある」という言葉から思いついたものだ。私が普段旅行をするときに匂いを観光地に向けているだろうかという自己反省がわき、ではにおいだけで旅行したらどうなるだろうかという興味関心から思いついた。長野県は森、果樹園、川といった自然から、人の営みのある都会、石油やセメントなどの工業までさまざまな風景の移ろいがありそこのにおいを感じることができるのではないかと思った次第である。ただ、このようなイベントに向いているのは 113 系やトロッコ客車というオープンな車両で、SR 1 系や E127 系,211 系,E129 系などでは難しい取り組みかと思った。

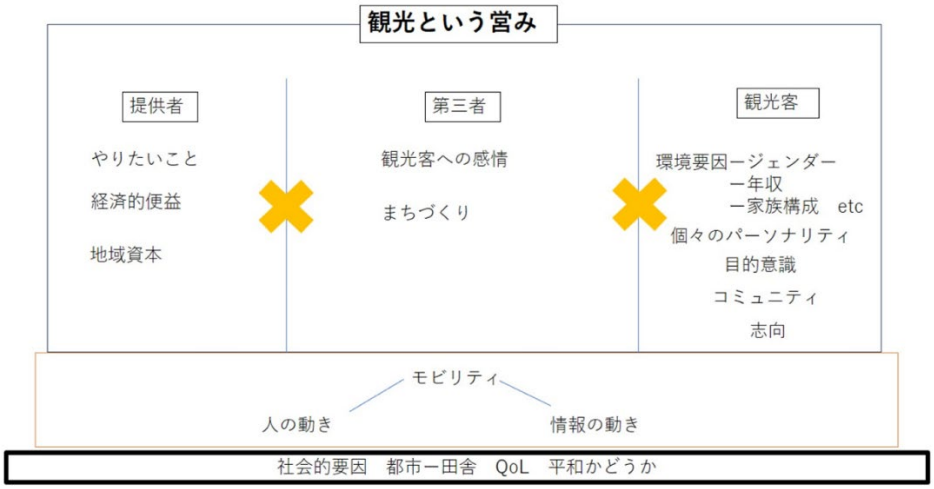
次に新幹線高架橋脚でパラパラ漫画である。これは何の脈絡もないものであるが、北陸新幹線の橋脚によって視界が遮られる区間があったので、見えない風景を別のものを見せることで車窓が楽しくなるのではと考えたからである。

最後に、信濃出会い旅キャンペーンである。これは長野県を旅行した時にこんな人にあってこんな楽しいことをした。こんな珍しいことをしたというエピソードベースの参加型コンテストを行い、優秀なものには長野県の旅行をプレゼントするとともに、募集されたエピソードを人が人を呼ぶ旅行の第一歩にしてもらうというものである。早い話がエピソード版インスタグラム投稿キャンペーンである。どんな人がどんな意外な体験をいい出会いとして記憶しているか、どんな出会いが長野県では提供できるのか運営も知り、それを全国に知ってもらう機会になるのではないかと思う。最後に 5 や 7、8 でふれた小諸城の市民活用や体験をベースとした共有アプリもやってほしい観光への取り組みである。

10. おわりに

3 日間を経て、フィールドワークではいい出会いに巡り合うことができ、私がやりたい地方創生ってこういうことなのだなというわくわくする気持ちになることができた。自分のやりたい地方創生とは、本人が楽しくするとともにそれが地域の人を笑顔にして、外部の人も楽しそうだねといってくれる笑顔を作れる空間づくりなのだと。そしてそのうえでイベントや地域特性に合ったアクセス手段、モビリティを

用意する、目的と手段をつくる仕事をしたいのだと言語化できた。そして観光とはいかに社会的な営みであろうかということが分かった。平和で旅行ができる環境にある人が、もっている手段を駆使して、見たいものや地域から提供されているものを享受することが観光の構図なのだということを感じ取れた。



（図 1）　フィールドワークで感じた観光という構図(著者作成)

今後の人生の軸を作ることができたと思う。それができる空間をさがしていきたい。その意味で自分のためにもなったし少し気分がよくなったすごくいい夢のような時間だった。深く感謝申し上げたい。素晴らしい出会いを与えてくださりありがとうございました。

参考文献

ジョン・アーリ,ヨーナス・ラースン(2014)『観光のまなざし』(加太宏邦訳)法政大学出版局

レスリー・カーン(2022)『フェミニストシティ』(東辻賢治郎訳)晶文社

停車場ガーデン「http://www.t-garden.org/ayumi/index.html」(最終閲覧：2023 年 9 月 15 日)